



Alacrity 通信

Alacrity 通信 第 1 号 2022.06.24 発行【創刊号】
編集 Alacrity Inc. <https://alacrity.jp>
東京都大田区西蒲田 8-24-1 TEL 03-5408-9755

この度、Alacrity 通信を創刊することになりました。
本コンサートへご来場いただいたお客さま限定で、この物語の主人公ミハイルと綾、演奏された作品と作曲家について、そして編集部コラムでは大正から昭和初期までの日本に西洋文化が取り入れられてきた歴史について 6 回にわたりご紹介いたします。

ミハイル・グリゴリエフ

Mikhail Petrovich Grigoriev

“あるロシア人亡命者” が果たした日本文化への貢献

ミハイル・ペトローヴィチ・グリゴリエフが来日したのは 1920 年 9 月。第一次世界大戦後の世界平和と国際協力を掲げて国際連盟が発足した年です。国際社会の新秩序構築に向けたうねりを背景に、グリゴリエフの故郷ロシアは、革命による帝政崩壊と内戦の真ただ中にありました。1917 年の革命勃発から 1920 年までの間に、200 万人とも推定される人々が、ソビエト政権の迫害から逃れるべくロシア国外に亡命しましたが、日本もその経由地として、あるいは定住地として、多くのロシア人亡命者を抱えることになったのです。

グリゴリエフもそうした亡命者の一人でした。来日に当たっては、日本軍参謀本部の支援の下、反革命勢力を率いていたグリゴリー・セミョーノフからの資金援助を受けていたほか、ロシア将校でありながらも通訳として日本軍の機密に近い立場にもあったため、日本軍からの保護も受けていました。そんな恵まれた環境の中で新生活がスタートしたかに思われますが、グリゴリエフの到着直後、彼を頼って命からがら東京にたどりついた妹弟や老父を抱えての生活は決して楽なものではありませんでした。来日した 1920 年から日本国籍を取得した 1930 年ごろまでの“要注外国人の動向に関する警察記録”には、グリゴリエフが軍の日露通訳を勤めたり、陸軍士官学校・拓殖大学などでロシア語を教えたりしていたことのほかに、得意な音楽を活かした演奏活動や日本各地での巡業を活発に行っていた様子も記されており、彼が幾つもの仕事をこなして、懸命に生計を支えていたことがうかがえます。

1920 年、大正 9 年を迎えた日本は、「第三波ロシア革命難民」と呼ばれる数千人ものロシア人を国内に迎え入れたわけですが、この人々が担い手となって、大正期の日本に欧米文化が華々しく紹介されま

Original Concert シリーズ
クラシック音楽と日本の歴史

Vol. 1 - The Russians
Violin & Piano Duo ~ 歴史 “Story”
「ミハイル・グリゴリエフの物語」

History

した。ある研究者が大正期のロシア文化には 1980 年代のアメリカ文化に匹敵する影響力があったと述べているように、こうしたロシアブームを背景に、グリゴリエフの草の根の音楽活動は、図らずもヨーロッパ文化を日本に伝える架け橋となったわけです。政治思想史学者丸山眞男が、自らの子供時代の述懐の中で、新宿の映画館「武蔵野館」で映画に合わせて堂々とオーケストラを指揮するグリゴリエフについて触れ、西洋音楽との衝撃的な出会いとして紹介しています。彼は、時には指揮者として、またある時にはマンドリンとチェロの奏者として、北は北海道から南は九州大分まで、文字通り日本中で公演活動を行ない、各地に西洋音楽を広めていったのです。もちろん住まいのある東京においても、映画館での指揮活動のほか多くの西洋音楽グループから奏者として、あるいは教師として呼びが掛かりまし



Courtesy of Paul Gregory

た。そして、そうした集まりの一つに生徒として訪れていたのが、後に妻となる同じ年の荒川綾でした。

荒川 綾

Aya "Vera Aleksandrovna" Arakawa

おとぎ話に魅せられた大正のお嬢さま

都心の広々としたお屋敷に居を構え、裕福で教養ある家族の下、何不自由なく暮らしていた綾は、当時の「豊かで国際的な国を目指す日本」を体現するお嬢さまだったといえるでしょう。そんな彼女の目には、命の危険におびえながら家族で異国に身を投じ、故郷ロシアを思慕しつつ、神田の「ニコライ堂」に熱心に通い詰め、ヨーロッパの音楽を奏でるグリゴリエフの姿は、あたかも西洋のおとぎ話の主人公のように魅惑的に映ったことでしょう。

出会いから程なく、グリゴリエフと綾は結婚しますが、新郎に請われるままロシア正教に改宗し、その魂のよりどころであるニコライ堂で挙式を執り行うことへの抵抗は、綾にはありませんでした。加えて、教養もあり実業家として一代で財を成した綾の父寅吉も、家族思いで働き者の才能あふれるロシア青年を娘の夫として迎えることに異存があるはずもなく、そんな2人の結婚は、空前のロシア文化・ヨーロッパ文化ブームに沸く大正日本社会の象徴といえるかもしれません。

結婚後はグリゴリエフの家族たちも荒川家に移り住み、日露混合の大家族での生活が始まりました。激動の革命期をたくましく生きてきたグリゴリエフ一家は、包容力あふれる綾の両親にも支えられて、ようやく落ち着いた生活を得ることができましたが、決して豊かな生活や援助に安住することなく、つましく働き続けました。自らの手でコツコツと財を築いた綾の父親は、そうした姿勢に強い共感を覚えたのか、娘婿グリゴリエフの弟ピーターが都内のインターナショナルスクール、そしてアメリカのカリフォルニア大学バークレー校に進学する際の援助も惜しみませんでした。

勤勉だったのはグリゴリエフの妹シューラも同様でした。幼くして母親を亡くしたこともあり、家の内でも外でもテキパキとした働きぶりを見せ、しかも美貌で知られたシューラは、綾にとっては、まさに「もう一人のおとぎ話の登場人物」でした。シューラを通して、ロシアのスタイルや食文化に次々と魅

せられる綾の様子は、後に雑誌『婦人之友』で、読者モデルよろしくヨーロッパのファッションや料理を紹介するところにも見てとれます。ところが反面、根っからのお嬢さまで、専属のお手伝いさんを結婚祝いとして与えられたような育ちの綾は、シューラに憧れる一方で、働き者で苦労人の彼女を悪意なく使用人として扱ってしまうことから、2人の関係はすっかりこじれてしまったため、困り果てたグリゴリエフは策を講じて、妹を上海に住むギムナジウム時代からの親友と急ぎ結婚させてしまったほどでした。

結果的に無国籍者のまま、日本語も理解できずに生涯を終えることも多かったという白系ロシア人亡命者たちの中であって、日本国籍を取ったばかりか、もともと日本語が極めて堪能であったグリゴリエフは、かなり変わった存在ではありました。しかし、そんな“変わった”彼がいたからこそ、国際文化的な豊かさを渴望していた大正期の日本人が、西洋クラシック音楽というものにより広く深く親しむことができたのではないかと思えるのです。

歴史研究家 榊原小葉子

参考文献

澤田和彦『白系ロシア人と日本文化』（成文社、2007年）
ポダルコ・ピョートル『白系ロシア人とニッポン』（成文社、2010年）
Sho Konishi, *Anarchist Modernity: Cooperatism and Japanese-Russian Intellectual Relations in Modern Japan*, Cambridge: Harvard University Press, 2013.



Courtesy of Paul Gregory

クララ・シューマン

Clara Josephine Wieck-Schumann

Music

「3つのロマンス Op. 22」 第1曲

Andante molto from 3 Romances, Op. 22

1853年にクララが最後に作曲した作品の一つ。柔らかく詩のようなバイオリンの甘い旋律と、ピアノの優しくも寛容で時に情熱的なメロディーは、夫ロベルトとの最後の穏やかで幸せな日々を物語るかのような作品。この作品が書かれたのは、夫ロベルトが1856年7月29日に亡くなる3年前でした。

クララ・ヨゼフィーネ・シューマン

(1819年9月13日 - 1896年5月20日)

1819年、ライプツィヒ生まれのクララは、100マルク紙幣の肖像に使われるほどのドイツを代表する国民的女神であり、19世紀に最も活躍した女性ピアニスト、作曲家です。



愛を貫き走り続けたスーパーウーマンの壮絶な生涯

クララは、ピアノ教師の父フリードリッヒ・ヴィークの弟子であったドイツを代表する作曲家ロベルト・シューマンと結婚しましたが、この結婚には、父ヴィークの激しい妨害と監視など幾多の波乱がありました。幼い頃から演奏家としてデビューし、ショパンやリストらが絶賛するほどの天才ピアニストとして華やかな道を歩んでいたクララ。それとは対照的に、ロベルトは20代から指の痛みなどの故障により演奏家としての道を断念、作曲家としてのキャリアも浅くまだ確固とした地位が築けていませんでした。父ヴィークにとって、フリードリッヒ家の稼ぎ頭であり大きな収入源である売れっ子ピアニストの娘を手放したくなかったのは当然で、そのことが結婚に反対する最も大きな理由だったと思われます。クララは、ヴィークによる激しい監視や妨害、ロベルトへの中傷などの嫌がらせから精神的に追い詰められ、結婚を諦めかけた時期もありましたが、ロベルトがそれを励まし、クララを説得して同意の上で父ヴィークを訴えて裁判で争います。そして2人の愛と絆に勝利の女神は微笑み、1840年9月12日にクララとロベルトは結婚します。クララ20歳、ロベルトは30歳の時でした。

1856年7月にロベルトが亡くなるまでの16年の間に、クララは8人の子供を出産。実に2年に1回

出産していることとなります。懐妊、出産と次々と家族が増え、子育てに追われる日々の中でも、クララは夫ロベルトの作曲家の仕事を支え、そして妻として支えました。また、ロベルトの収入だけでは生活が苦しかったので、大家族の家計を支えるためにハードなスケジュールの中でも精力的に演奏活動をこなすという、まさに八面六臂のスーパーウーマンぶりでした。

「3つのロマンス Op. 22」が書かれた頃は、平穏な日々を送る一方で、ロベルトの精神的な病の症状が徐々に悪化していった時期でもありました。翌年の1854年2月、幻覚や幻聴などの症状が悪化したロベルトは、ライン川に身を投げ自殺を図ります。幸い救助され自殺は未遂に終わりましたが、クララはこの時8人目の子供を懐妊中。彼女を気遣う医師の判断で、クララがこの事件を知らされたのは、夫が亡くなった2年後でした。

この事件の翌月、身重のクララや家族に危害が及ぶことを恐れたロベルトは、家族を守るため自ら望んでボン近郊の療養所（精神病院）に入ります。その6月にクララは無事8人目の子供を出産しますが、ロベルトと再会できたのは2年後の1856年7月27日。ロベルトはその2日後に46歳の若さで亡くなり、クララは36歳で未亡人となるのです。

クララの人生は、ロベルトと共に困難を乗り越え結ばれた愛と情熱とのはざまに、大家族ゆえの多忙と苦勞の絶えないものでした。そんなクララの記事には、「子供は3人か4人で充分」といった弱音とも冗談とも取れる言葉が記されているそうです。

それでも、やはりクララはスーパーウーマン。ロベルトの死後、夫の精神病のイメージを払拭し彼の名譽を守るために、コンサートやツアーで積極的に演奏し作品を伝え広めました。そして、子供たちの良き母として、また若い音楽家を指導する教育者として、1896年5月20日に76歳で亡くなるまでの日々を、そしてその激動の時代をたくましく走り続けた女性でした。この作品の背景には、このようなクララの壮絶な人生がありました。

作曲家の仕事が音楽家として、そして妻として支えました。また、ロベルトの収入だけでは生活が苦しかったので、大家族の家計を支えるためにハードなスケジュールの中でも精力的に演奏活動をこなすという、まさに八面六臂のスーパーウーマンぶりでした。

「3つのロマンス Op. 22」が書かれた頃は、平穩な日々を送る一方で、ロベルトの精神的な病の症状が徐々に悪化していった時期でもありました。翌年の1854年2月、幻覚や幻聴などの症状が悪化したロベルトは、ライン川に身を投げ自殺を図ります。幸い救助され自殺は未遂に終わりましたが、クララはこの時8人目の子供を懐妊中。彼女を気遣う医師の判断で、クララがこの事件を知らされたのは、夫が亡くなった2年後でした。

この事件の翌月、身重のクララや家族に危害が及ぶことを恐れたロベルトは、家族を守るため自ら望んでボン近郊の療養所（精神病院）に入ります。その6月にクララは無事8人目の子供を出産しますが、ロベルトと再会できたのは2年後の1856年7月27日。ロベルトはその2日後に46歳の若さで亡くなり、クララは36歳で未亡人となるのです。

クララの人生は、ロベルトと共に困難を乗り越え結ばれた愛と情熱とのはざまに、大家族ゆえの多忙と苦勞の絶えないものでした。そんなクララの記事には、「子供は3人か4人で充分」といった弱音とも冗談とも取れる言葉が記されているそうです。

それでも、やはりクララはスーパーウーマン。ロベルトの死後、夫の精神病のイメージを払拭し彼の名譽を守るために、コンサートやツアーで積極的に演奏し作品を伝え広めました。そして、子供たちの良き母として、また若い音楽家を指導する教育者として、1896年5月20日に76歳で亡くなるまでの日々

を、そしてその激動の時代をたくましく走り続けた女性でした。この作品の背景には、このようなクララの壮絶な人生がありました。

Alacrity 編集部

編集部コラムは次のページへ



編集部

大

正

モ

ダ

ン

コラム



ハイカラさん登場！

時は大正。大戦景気で華やかさを謳歌した一方で、戦後恐慌、さらには関東大震災と暗い影も差し、日本は政治、経済、文化、教育、そして生活そのものまで大きく様変わりしました。そんな中で人々は、西洋から入ってくる文化を模倣しながら日本独自のものをより際立たせたり、化学反応を起こさせたり、あるいは“いいとこ取り”をしたりして、「和洋折衷」という何とも不思議で魅力的な文化を生み出しました。その代表的なものが、女学生の袴姿に編み上げブーツという「ハイカラさん」スタイル。

ふっくらと膨らませた髪に大きなリボン。この髪型は、和服にも洋服にも合うということで鹿鳴館時代に欧米のポンパドールをまねて取り入れられた「庇髪（ひさしがみ）」をアレンジしたもの。リボンもまた西洋から入ってきた大事なおしゃれアイテムでした。100年たった今でもこのスタイルは女の子の憧れで、卒業式や成人式には現代の「ハイカラさん」たちの姿が見られます。

ハイカラさんといえば、漫画『はいからさんが通る』を夢中で読んだという方も多いのでは？ アニメにもなり、実写版映画にもなり、宝塚歌劇団による舞台化もされたほど、一世を風靡したお話です。主人公は、女性解放運動家・平塚らいてうの「元始、女性は太陽であった」という言葉をそのまま体現したような、はつらつとしたじゃじゃ馬娘・花村紅緒。親の決めた結婚が当たり前の時代に、恋も大事、仕事も大事、自分の人生は自分で選びたいというキャラクターは、大正という時代のイメージを強烈に焼き付けたのではないのでしょうか。

当時、女学生というのは数少ないエリートでした。この女性たちが後に自らの意志で社会に進出し、新しい女性として大正ロマンや昭和モダンを先導し、モダンガールという新時代を象徴する存在となっていくのです。セーラー服の制服が登場したのも大正時代でした。

一方、男子学生はといえば、詰襟にインバネスコートが定番スタイル。インバネスコートはスコットランド生まれで、シャーロック・ホームズのトレードマークとしてよく知られています。着物でも袖が邪魔にならなくてとても便利だったので、日本でも大変流行しました。当時、学生の間では詰襟の学生服をわざと崩して着るのが粋だとされ、学帽を汚した

りつぶしたり、制服をボロボロにしたり。そして、腰に手ぬぐいをぶら下げてインバネスコートを颯爽とまとうのがカッコイイ姿。「西洋かぶれのハイカラなんか認めないぞ、日本男子たるもの外見を飾るより中身を磨くことが大事だ！」…みたいな感じでしょうか。このスタイルは粗野で野蛮だということから、「ハイカラ」をもじって「バンカラ」と呼ばれました。

大正時代の中期になると、都市部の中流階級に洋風の応接間があって寝室や書斎は畳の和室という、和洋折衷住宅が広まりました。洋食も一般に広まるようになります。「大正の三大洋食」といわれるカレーライス、コロケ、トンカツは現在でも人気メニューですが、これらもまた西洋から入ってきたものを日本流にアレンジした和洋折衷メニュー。何でも取り入れ、ものにしてしまうという、なんというたくましさ。とはいえ、当時はまだまだ贅沢な食べ物だったようですが……。



配信期間：URLより各号配信日から30日間閲覧可能（非公開）

2021年公演ご来場者さま（6～11月まで/月1回）

2022年公演ご来場者さま（8～1月まで/月1回）

第1号【創刊号】は、住所をご登録いただいたお客様に限り郵送させていただきます。

第2号からは、メール配信のみのご案内となります。

E-Mail アドレスのご登録がないお客さまには、創刊号以降はご案内ができません。

引続き購読をご希望の場合は、Alacrityまでお問合せをお願いいたします。

第2号のご案内は、7/28～29の配信となります。

【お問合せ先】

お問合わせフォーム：<https://alacrity.jp/contact/>

E-mail: music@alacrity.jp

